

目次		CONTENTS
2006年度全国大会について	1	地区研究会報告 8
大会委員長からの挨拶	2	地区研究会案内 12
大会発表募集要項	3	学会専用サイトについて 13
大会概要(プログラム予定)	4	ホラロジーの会について 14
新理事の挨拶	5	特任理事の挨拶 15
2005年度第4回理事会議事録	6	関連学会・研究会情報 16
「私の提言」第3回	7	事務局の移転案内 / 編集後記 16

## 2006年度全国大会について

【開催日】10月21日(土)および22日(日)  
【会場】立教大学 池袋キャンパス(東京都豊島区池袋)

### 大会テーマ：多文化関係とパラダイムシフト ——新しい視点の開拓——

Multicultural Relations & Paradigm Shifts:  
Developing New Perspectives



ただ今研究発表を募集中です。ふるってご応募下さい。  
(応募要項は、p.3をご参照ください)  
締め切りは7月25日(火)です。

大会委員長挨拶

## 多文化関係学会第5回全国大会に向けて

久米昭元（立教大学）

多文化関係学会(JSMR)の第5回年次大会は、来る10月21日(土)、22日(日)に立教大学池袋キャンパスで開催されることになりました。

今年度の大会テーマは「多文化関係とパラダイムシフト——新しい視点の開拓 (Multicultural Relations & Paradigm Shifts: Developing New Perspectives)」としました。学会設立以来、その趣旨に関連した研究は増加しているものの、まだまだ試行錯誤の状況です。そのため多文化関係学の構築に向けて少しでも前進できるようにという思いから当テーマの設定となりました。当学会は、われわれにとってかけがえのない地球社会を守るために、多様な文化間の相互作用と関係性を、多面的かつ動的に研究し、議論する場です。21世紀以降の世界はグローバル化のさらなる進展と共に、民族・宗教の歴史的対立、紛争・テロの激化、そして価値観・世界観の相克など複合的な要素の介在により、多文化の関係性が複雑化しています。個人レベルから組織、社会、国家、地域レベルに至るまでの諸問題を超領域的な視点からアプローチする本学会の研究・教育活動はますます重要になっているだけに、今後さらに新しい視点を加えることが必要になってくるように思われます。

大会第1日目の午後に行う招聘講演には国際理解教育の分野で長年精力的な活動を続け、同時に新たな視点の必要性を主張している専門家をお招きします。引き続いて行われるパネル・ディスカッションでは「日本社会における多文化インターラクション——今、何が起きているのか？」を計画しています。多文化インターラクションは、今や、日本人と外国人の間だけの問題ではなく、ジェンダーや世代、経済格差などの問題でもあるという趣旨のもとで国際交流をはじめ各界で活躍中の方々をパネリストとして招きます。大会第2日目の午前中に行われる特別セッション「多文化関係学の構築に向けて——パラダイム・シフトの視点から」には、大会テーマに即した講演に引き続き、講演者と3名のディスカッサントを交えた意見交換のセッションを行います。また、大会前日の10月20日(金)午後にはプリカンファレンス・ワークショップとして「フィールドワーク入門——面接調査法を中心に」(仮題)を企画しています。

立教大学はJR池袋駅から徒歩で約10分の交通至便なところに位置しています。東京駅から地下鉄丸の内線に乗れば約17分、また、羽田からは約1時間です。多数の皆様の積極的なご参加を心よりお待ちしております。

# 2006 年度全国大会・発表募集要項

【大会テーマ】

多文化関係とパラダイムシフト 新しい視点の開拓

Multicultural Relations & Paradigm Shifts: Developing New Perspectives

1. 発表資格: 発表者は申し込み時点で本学会の会員であること。共同発表者がある場合、当該者も会員であることが望ましいが、必ずしもその限りではない。
2. 発表テーマ: 本学会の趣旨にそったもので、未発表のものに限る。
3. 発表時間: 原則として30分(発表20分、質疑応答10分)とする。
4. 申し込み締め切り: 2006年7月25日(火)(消印有効)
5. 申し込み要領: A4サイズ用紙1枚に次のことを明記し、電子メール(送付)とハードコピー(郵送)を大会委員長宛に送ること。(1) 必要個人情報(氏名・所属・職責・専門分野・連絡先住所・電話・ファックス・電子メールアドレス)、(2) 発表タイトル(できるだけサブタイトルも)、(3) 発表概要(400字~600字)および(4) 本学会の主要研究領域(社会・心理・言語・コミュニケーション・地域間研究)から1領域を明記すること。
6. 発表者の決定: 発表申込書は大会委員会で審議し、採用となった発表者には7月31日までに電子メールまたはファックスで連絡し、同時に発表者と発表タイトルを学会ホームページ上に掲載する。
7. 抄録の提出: 発表予定者は8月26日(土)までに発表内容の抄録(A4サイズ2枚または4枚のいずれかとする。抄録(ワードで作成すること)は横書きで1枚あたり横40字、縦30行とする。文字の大きさは10.5~11ポイント、日本語の文字は平成明朝またはMS明朝、英語の文字はTimes New Romanとする)を大会委員長にワード添付で電子メール送付し、ハードコピーを大会準備委員会に郵送する。発表要旨は、大会当日、『第5回年次大会発表抄録集』として参加者に配布する。

尚、大学院生を対象に研究発表奨励賞(「石井ファンド」: 1人20,000円、5名まで)制度があります。希望者は大会準備委員会へお問い合わせ下さい。

## 大会準備委員会の宛先

郵便: 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1  
立教大学 久米研究室内 多文化関係学会・大会準備委員会  
メールアドレス: jsmr2006@ir.rikkyo.ac.jp  
ファックス: (03) 3985-2292 (久米研究室宛と明記すること)

## 2006 年度全国大会・概要

【大会テーマ】

多文化関係とパラダイムシフト

新しい視点の開拓

Multicultural Relations & Paradigm Shifts:

Developing New Perspectives

10月20日(金)[大会前日]

プリカンファレンス・ワークショップ .....午後1時~5時

10月21日(土)[大会第1日]

研究発表1 ..... 午前10時~12時

招聘講演 .....午後1時30分~3時

パネル・ディスカッション .....午後3時15分~4時45分

10月22日(日)[大会第2日]

研究発表2 ..... 午前9時30分~10時30分

特別セッション .....午前10時45分~午後0時30分

研究発表3 ..... 午後1時30分~3時

会場：立教大学池袋キャンパス

参加費：2,000円(一般会員) 1,000円(学生会員)

3,000円(非会員)

懇親会：4,000円(一般会員) 2,000円(学生会員)

大会詳細・入会申し込みは学会ホームページへ：<http://www.js-mr.org/>

会場地図：<http://www.rikkyo.ac.jp>

## 新理事の挨拶



### 灘光洋子(成蹊大学)

多文化関係学会の理事に、ピンチヒッターとして舞い戻って参りました。今回の任期は、そのような事情で短いものとなる見込みですが、次回大会企画委員として、できるだけことはさせていたいただきたいと思っております。今年の大会では、学会の方向性をこれまで以上に出していきえるようにと、理事一同、はりきっております。この学会での活動を通して、多彩な顔ぶれのメンバーの方々と共に学ぶ機会を与えられていることは、大きな喜びでもあります。忌憚なく話し合える場というのは、学術面においても、具体的な運営においても大切ですが、この学会にはその自由闊達な雰囲気があるような気がいたします。そのような学会の「文化」が育つよう、少しでもお手伝いできれば幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

### 金本伊津子(平安女学院大学)

この度 2006 年度の理事を仰せつかり、多文化関係学会の活動の中心に身を置く機会をいただきました。今後とも一層のご指導・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

専門は文化人類学です。アメリカ・ブラジル・ハワイをフィールドにして海外在住の日本人・日系人の「老い」に注目しながら、文化の喪失の過程を研究しています。一昨年は、ブラジルのアマゾンやパラグアイの国境まで巡回診療団とともに日本人に会いに行ってきました。昨年度からはフィールドをアメリカに戻して、10 年前に行ったフィールドワークの追跡比較調査を行っています。「こんなところまでわざわざ私の話を聞きに来てくれてありがとう」とどこに行っても歓迎していただけるので、ついつい同じテーマで 10 年以上も研究を続けてしまいました。アメリカ・ブラジル・日本の文化という三者の多文化関係を追いかけています。

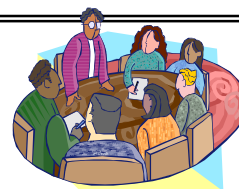
### John E. Ingulsrud ジョン・イングルスルド (明星大学)

私は東京に生まれ、家庭はアメリカ人のキリスト教宣教師であり、浜松と名古屋に暮らしました。大学と大学院教育はアメリカで受け、その後、英語教育を中心に熊本や中国の大学で教え、現在は東京の明星大学の教授として勤めております。

専門は応用言語学で、リテラシーと談話の分析について研究を進めてきました。明星大学の人文学研究科でクリティカルディスコース分析(CDA)の論文指導をしており、また学部の国際コミュニケーション学科では「環境とコミュニケーション」というテーマでフィールドワークを担当しています。学生は、ニュージーランドかオーストラリアに行き、現地の人と一緒に活動しながら調査を行っています。

日本に帰ってきて 10 年以上になりますが、大学の教員として、管理責任のある役職がかなり与えられてきています。その職務を果たす中で、国文化対照的知識があまり役に立たないことに発見しました。本学会の魅力は、異文化間に起きる諸問題を複数な角度から取り上げられることであると考えます。よろしくお願い致します。

## 2005 年度第 4 回理事会議事録（抄録）



日時：2006 年 3 月 10 日 場所：立教大学

出席者：青木久美子、岡部朗一、久米昭元、河野康成、小林登志生、小松照幸、西原鈴子、林吉郎、細川隆雄、松田陽子、灘光洋子（途中参加）、大谷みどり（オブザーバー、書記）（敬称略）

### 報告事項

- 1) 財務状況：決算報告について 3 月末に監査を行い、6 月の理事会までに予算案を作成する。
- 2) ホームページのメンテナンスについて
- 3) 事務局ウェブ個人情報管理及びディスカッション・ボードの導入・運用について
- 4) 地区別研究会実施の報告・予定

### 審議事項

- 1) 理事欠員 3 名の補充について  
（杉本なおみ理事退会、ヒダシ理事 2 月末帰国、抱井理事 4 月から 1 年在外研究、による欠員）灘光洋子氏、ジョン・イングルスルード氏、金本伊津子氏の 3 名を選出（総会で事後承諾を得るものとする）。今回の補充理事の任期は、残りの 1 年間とする。
- 2) ニュースレター委員長の選任と委員の交代について  
ヒダシ委員長の帰国に伴い新委員長として、伊藤明美理事を選任。委員として磯崎氏に代わり、生越氏が就任。徳井氏は委員として留任。
- 3) ヒダシ理事（ハンガリーに帰国）を特任理事として選出することについて  
特任理事というポストを新たに設定する（会則の変更）ことを承認。海外在住の理事として学会に寄与してもらう。任期は決めない。同氏に特任理事への就任と、ヨーロッパ支部立ち上げの検討を依頼。
- 4) 2006 年度の年次大会について  
10 月 21 日（土）・22 日（日）立教大学において実施。10 月 20 日（金）プリカンファレンス・ワークショップを実施。大会委員：林・久米（委員長）・松田・小松・灘光・河野・青木・手塚・磯崎・イングルスルード。テーマおよび内容について検討。細部の決定は理事会後の大会委員会で行うこととする。
- 5) 学会事務の一部移管について  
4 月から名古屋学院大学小松研究室に事務局が移転するにあたって、仕事軽減のためにインターブックス社に印刷、発送等業務委託を検討。

6) 学会誌の方針について

今後の方針を編集委員会で検討し、その案を次回の理事会に諮ることとする。

7) 学会誌編集委員長の権限について

編集作業の責任者であり、学会誌の発展のための戦略策定に関わるものとする。

8) 学会誌への投稿原稿の締め切り日について

前回の理事会では3月31日と決定して会員に周知したが、学会ホームページ上では4月30日と掲載されていることが判明したため、今回に限り、4月30日でもよいこととし、出来れば早めに提出してほしいという旨を事務局から会員への一斉メールで通知することとする。

9) ホラロジー研究会について

12月半ばに第1回の立ち上げ会が実施された。将来は他の地区に拡大することを確認。(ホラロジー研究会とは、ホラをふきながら、自由にアカデミックな夢を語る会)

10) 学会案内のリーフレット作成について

内容について検討。英語併記することを承認。デザインは業者に委託。5月末に完成予定をめざす。

11) 会則の改正について

灘光新理事が担当し、これまでに行われた改正事項を整理することになった。

以上。

### 私の提言 第3回

小松 照幸  
(名古屋学院大学)

学会の社会的使命は、紀要創刊号(2004)に述べられてあります。それは21世紀の世界の状況の中で「これまでの学問がともすれば見落としがちであった文化という側面から、学際的な解明を試み明確な方法論に裏付けられた『多文化関係学』という学問の成立」を目指ことであります(石井米雄先生、学会顧問、人間文化研究機構長)。学会の研究支柱は「多文化の関係性」と「パラダイムシフト」ですが、そのための研究方法と研究課題はまだまだ収斂されていません。4年経った今、大きく網を被せた学際的研究は、手探りの状態からいよいよオープンに議論し、学会としてのスタンスをもっと明確にしなければならない所に来ていると考えます。

20世紀の多文化関係をここで少し俯瞰してみると、その初頭には家族、社会、文化の構造分析(Structural Analysis)が盛んになり、欧米先進国を中心として社会発展(Modernity)に伴う富の社会的分配や権力構造分析が行われました。20世紀中葉には、世界的規模の戦争と経済発展により国際政治と国際経済研究が盛んとなり、戦後のグローバル化の進展は、「民族」の意識がより複雑な複合体としての人種、言語、文化、宗教がクロスする多文化社会を現出し、複雑系の国際化を進展させ続けてきています。個人、集団、国家そして国家間の利害関係や紛争関係はこれまでの地域的な存在から、国境を越えたダメージと影響力を与えます。日本においても国レベルの政治、経済問題が靖国神社のケー

スで見られるように日本と隣国の社会・文化的コンテクストを国民一人一人が深く考え理解し行動しなければならない時代になっています。日本の社会問題というマクロレベルの国民的課題と家族・学校・地域など個人の日常生活におけるミクロレベルの問題まで、よくよく考えると個人、集団、国家、国際関係はマクロ・ミクロの関係性によって一衣帯水的状況となっています。

2006年9月にイギリスで開催されるヨーロッパ SIETAR 会議のメインテーマでは、宗教問題、ビジネスと倫理の問題、差別と人種偏見、そしてイデオロギーと教育問題が取り上げられています。戦争が人の心から始まるならば、まず個人と社会の病理現象に対して日本人と日本社会の来歴を振り返り、ソフトパワーとしての文化的治癒力を明らかにしなければならぬと思います。

## 地区研究会報告



### 関東地区研究会ワークショップ【文系研究者のための、はじめての Excel・SPSS】報告

日時 2006年3月9日、10日

場所 立教大学

3月9日・10日の両日、立教大学で多文化関係学会主催の、「文系研究者のための、はじめての Excel・SPSS」ワークショップに参加した。講師は、立教大学の河野康成氏、メディア教育開発センターの青木久美子氏、そしてアシスタントとして青山学院大学の原田満里子氏が手伝ってくださり、データの集計の仕方やコンピューター上での処理の仕方を学びたい文系の研究者にとっては、大変貴重な2日間であった。

40名ほどが参加し、大学のPCルームで講師の説明を聞き、各自パソコンで操作し、さらに河野氏・青木氏・原田氏が多大な時間をかけて作成された100ページ以上のテキストで作業を確認しつつワークショップは進められた。1日目は、Excelの基本操作に始まり、平均や合計などの計算、表の作成・整形の仕方、様々なグラフの作り方、インターネット上などにある表の取り込み方や加工の仕方、インタビュー結果のまとめ方などを、事前に準備された例を使いながら学ぶことが出来た。2日目は、Excelで可能な統計分析に関して、ヒストグラムと度数分析、カイ二乗検定やt検定に続き、Excelよりも高度な統計分析が可能なSPSSについて、その環境やデータ入力の仕方、様々な分析方法について、統計についても非常に分かりやすい解説をきき、かつ色々な課題に取り組みながら学ぶことが出来た。

統計ソフトに関する本は数多く出版され講習会なども開かれているが、研究者、特に文系の研究者が必要とする知識や技術を得られる機会は極めて少ない。統計に弱い私などはこれまで、市販のテキストと格闘しながら、なかなか理解も納得も出来ない状態であったが、今回のワークショップで、これまで知りたかったことと共に、より一層効果的な分析



方法や表示の仕方を学ぶことができた。貴重な知識と技術を伝授して下さい、また丁寧に、かつ熱く指導して下さい。河野氏・青木氏・原田氏に心からお礼申し上げたい。

(文責: 大谷みどり 島根大学)

### 中国・四国地区研究会報告

日時 2006年2月18日(土曜日) 午後1~3時

場所 愛媛大学農学部第11番教室

話題提供者

(1) 武智盛浄(伊豫岡八幡神社)

「ロシアと愛媛の文化交流」

(2) 大谷みどり(島根大学)

「外国人指導助手(ALT)と学校・地域における文化交流」

---

世界は今、さまざまな摩擦、対立で混沌としている。世界の人々が仲良くしていくにはどうすればよいのか。そのためには、継続的な文化交流の実践が基本的要件となるのではないか。本研究会では、地域レベルにおける国際文化交流のあり方を探った。

前半は、武智氏が10年以上にわたって実践してこられた、ロシアと愛媛との文化交流に焦点を当て、多くの関連の写真を用いて、草の根的文化交流の可能性と困難性について話題提供がなされた。松山は、ロシア人捕虜収容所、ロシア人墓地で有名だが、明治時代に、愛媛県伊豫市にある伊豫岡八幡神社に、日露戦争・満州での一戦闘場面を描いた絵馬が奉納された。その絵馬の核心部分は、日本兵が負傷したロシア兵を人道的に介抱しているという点にある。戦場での心温まる人間的交流であった。この絵馬を契機として、氏によるロシアと愛媛との草の根的国際文化交流が始まった。シベリアで亡くなった日本人戦死者の墓を、氏自らがシベリアの地におもむいて、現地のロシア人と協力してこしらえたり、シベリアから松山にロシアの少年野球チームを招いたり、等々の文化交流を実践してきた。氏は草の根的国際交流の継続条件として、資金を含めての両国間の双務性が最大の要件だと指摘した。

後半は、大谷氏によって、外国人指導助手(ALT)とJETプログラム、ALTとの文化交流・ALTの貢献面、ALTと教員間の摩擦と相互理解、これからの国際文化交流のあり方の4点について、氏のこれまでの調査研究を踏まえての話題提供がなされた。氏はむしろもろもろの摩擦を通じての積極的相互理解の必要性を指摘した。質疑応答を通じて、ALT制度の問題点として浮かび上がった点は、第1にALTの資質の問題であり、第2に制度維持のための費用対効果の問題であった。ひとつの改善策として、ALT要員選考のさいには、適格性も含めてより厳格な選抜制度の確立が必要ではないかという意見も出た。

(文責: 細川隆雄 愛媛大学)

## 地区研究会報告(続き)



### 中部地区研究会報告

日時 2006年3月18日(土)午後3時~5時

場所 南山大学L棟911会議室

話題提供者:小松照幸氏(名古屋学院大学)

トピック:多文化関係学へのアプローチ その領域と研究方法

出席者:9名(会員4名、非会員5名)

3月18日に中部地区における第1回の研究会を南山大学にて開催した。愛知、岐阜、三重の東海3県を中心として、それに隣接する静岡、長野までを含めた中部地区に在住する会員は現在15名を数えるのみである。このような地区で今後会員数を増やす方策の第一歩として、第1回研究会が企画された。話題提供者として小松照幸氏を招き、「多文化関係学」とはどのような領域かをトピックにして話していただいた。

小松氏は多文化関係学が現代という時代文脈的な背景を背負って生まれたもので、パラダイムシフト(思考の枠組みの変動)を視野に入れながら、超領域性という視点から共生する多文化社会の関係性を解明する学問分野であることをまず明らかにした。次いで、多文化関係学の前提となる文化、社会および人間という基本概念をいかに理解すべきかについての所論を展開した後で、人間と社会と文化とのつながりを多元的に考察する多文化関係学は、マクロ文化(社会・文化システム)の視点とミクロ文化(日常生活)の視点から両者の多文化的関係性のありかたを考察する学問分野で、そのための分析モデルを試論的に提案した。

後半の1時間は話題提供者と出席者との間で、多文化関係学の研究領域、その研究方法、他の領域には見られない特徴を巡って活発な質疑応答に費やされた。研究会終了後に、近くの中中華レストランで7名の出席のもとに懇親会が開催され、親睦を深めた。

(文責:岡部朗一 南山大学)

### 次回研究会の予告

会員数が少ない地区であるために、当面は1年に1回の研究会開催を考えている。次回研究会は2007年3月に開催する予定。



## 関西地区研究会報告

日時 2006年3月17日(金) 場所 関西学院大学

- (1) 「多様な文化背景を持つ子ども達の表現活動 阪神大震災後の神戸の取り組みから」  
話題提供者：日比野純一（NPO 法人たかとりコミュニティセンター専務理事・FM わいわい代表）
- (2) 「心の和み 日本人らしいコミュニケーションとは？」  
話題提供者：今井千景（大阪大学・関西大学）

---

日比野氏は、1995年の阪神淡路大震災での救援活動をきっかけに、神戸に在住するベトナム人や日系ブラジル人、ペルー人をはじめとする外国人の生活を支援することを中心として、「NPO 法人たかとりコミュニティセンター」、および、多言語のコミュニティラジオ放送「FM わいわい」を立ち上げられた。そして、さまざまな活動を進めていく中で、多文化な子ども達が、ビデオを使って自己を表現するという活動を始めるに至った。彼らがビデオ映像作成に向かおうとするとき、心の底に潜んでいたあふれる思いに気づき、それを表現しようとする中で、自分自身にしっかりと向き合い、アイデンティティを見出していく過程を示された。そして、その作品の上映を通じて、作者とビデオ視聴者たちとの共感が生まれ、その広がりが社会を動かしていくパワーとなっていく経緯について、熱く語られた。さらに、多文化な子供たちとの関係を通じて、支援する側 される側という力関係を越えた所で、相互に得ていくものがあることや、周囲のホスト社会の側にも「見えてくる世界が広がる」ことに気づくことが重要であり、そのプラス面をどうやって多くの人に伝えていくかが、今の大きな課題であるということも指摘された。最後に、ブラジル日系人の松原ルマさん(15歳)の作品『レモン』(東京ビデオフェスティバル2006で優秀賞、ピープル賞を受賞)が上映され、参加者との熱心な議論が交わされた。

今井氏は、インタビュー調査という方法を用いて、日本人のコミュニケーション研究として、「和み」をテーマに取り組んでおられる。「あなたの日常のコミュニケーションの中で、心が和んだ体験を話してください」というテーマで、インタビューを重ね、これまでに集めた82例の分析を行い、興味深いパターンを抽出された。そこには、相手に能動的な感情を働かせることばの作用が見出され、それが、一瞬にして起こる感覚的なものとして機能しているように見受けられることが指摘された。西洋の線的な論理展開に比べ、日本文化は「点的論理」であるという観点から、聞く側が点と点の間を埋め、奥行きを見出し、点を面にしていき、次元が違うところで論理をつないでいく、そして、議論が対立する時には、別の次元に持っていくことで「和み」の感覚によって共感を作り出し、問題解決しようとするという特徴があることが論じられた。「和み」というユニークなテーマをめぐる研究を通じて、日本人のコミュニケーションが「あいまい」に感じられることの理論的解明にも挑むというたいへん興味深い研究であった。

異なるテーマの二つの発表であったが、双方とも、人と人との関係づくりのプラス面に光を当て、より良い関係を生み出しているのは「共感」であり、そこから「共鳴」が起きる現象をとらえておられた。これが、多文化な関係を見ていくためのキーワードの一つとなることが示されたように思う。

(文責: 松田陽子 兵庫県立大学)

## 地区研究会案内



### 北海道・東北地区研究会のお知らせ

今年度は、学会特任理事のヒダシ・ユディット先生による講演会を開催いたします。日本人の異文化コミュニケーションについて、東ヨーロッパの視点からわかりやすくお話を頂いた後、参加者をまじえたトークセッションも用意しております。ふるってご参加下さい。

日時：2006年8月12日 土 午後3時～4時30分

場所：藤女子大学 北16条キャンパス (<http://www.jufujoshi.ac.jp>)

講師：ヒダシ・ユディット

申し込みは伊藤 ([itoakemi@fujijoshi.ac.jp](mailto:itoakemi@fujijoshi.ac.jp)) まで

### 関東地区研究会のお知らせ

夏休み前のひととき、多文化が複雑にからみあう現場で仕事をされているお二人から、お話をうかがいます。最近2回の研究調査や方法論から、今回は現場に目を転じたいと思います。多様な外国人、日本人の間での医療や支援の実践報告を親しくお聞きし、多文化インタラクションの実情、共生の課題、苦悩、可能性について、みなさんと考えたいと願い、参加をお待ちしております。

日時：7月22日(土)3時より6時(6時半より懇親会予定)

場所：青山学院大学8号館4階コモンルーム

交通 アクセス▶<http://www.aoyama.ac.jp/other/access/aoyama.html>

キャンパス・マップ▶<http://www.aoyama.ac.jp/other/map/aoyama.html>

会費：無料

話題提供者

#### (1) 中島スサナ氏「年少者の日本語支援」

プロフィール: 先物相場アナリストから転じ、千葉県の小、中、高校で、通訳講師・外国人児童生徒相談員として、サポートと架け橋役に奔走中の日系ブラジル人

#### (2) 小林米幸氏「文化と医療」

プロフィール: 小林国際クリニック院長、AMDA 国際医療情報センター理事長等要職を歴任、ご著書に『外国人患者診療・看護ガイド』『外国人患者への外来対応マニュアル』等多数

申し込み先：7月15日までに、手塚千鶴子まで(慶応義塾大学国際センター)

E-mail: [ctezuka@ic.keio.ac.jp](mailto:ctezuka@ic.keio.ac.jp) TEL: 03-5427-1444

## 関西地区研究会のお知らせ

日時：2006年7月25日（火） 午後1時30分から5時（5時半から懇親会）

場所：関西大学 千里山キャンパス 岩崎記念館 4階 多目的ホール

話題提供者：

- （1）金本伊津子（平安女学院大学） 「アメリカ・ブラジルにおける日本人・日系人の老い 多文化社会における文化喪失の過程」
- （2）古賀幸久（久留米大学） 「イスラム社会の理想と現実—パキスタンの生活を通して」

ご参加の方は、7月15日までに、研究会担当の松田陽子（matsuda@econ.u-hyogo.ac.jp）までご連絡ください。

### 学会専用サイトについて



昨年10月の学会ホームページの新規立ち上げに続いて、今年2月に学会員の専用ウェブサイトを立ち上げました。学会員専用ウェブサイトは、各自の学会員番号とパスワードを使って、学会員のみ閲覧することの出来るウェブサイトです。このサイトの目的は、学会員同士のコミュニケーションの活性化にあり、学会員専用サイトにログインすることによって、基本的に以下の二つのことができます。一つには、会員同士のコミュニケーションを図るディスカッションボードに参加できることです。現在、このディスカッションボードには、学会員全員に開放されたもの、事務局のみ書き込みが出来るもの、理事のみに閉じられたものの3種類があります。「学会会員の声」、「学会のミッションについて」、「自由投稿」、「教員職員公募案内」、「関連学会・研究会等のお知らせ」は、どなたでも書き込みが出来るので、積極的に活用してください。二つめには、学会員の会員情報を検索できることにあります。情報は、会員本人が公開とチェックした情報のみしか見ることはできませんが、会員名や研究分野により、会員情報を検索することが出来ます。情報を公開としても、この会員専用サイトにログインできる会員しか閲覧できませんから、積極的にメールアドレスや現職の情報を他の会員に公開することをお勧めします。自分の情報を確認する際には、「登録情報更新」のボタンをクリックすることによって、自分の登録情報を見ることができます。この会員専用サイトが大いに活用され、学会員同士のコミュニケーションが今後さらに活性化されることを期待しています。

（文責：青木久美子 メディア教育開発センター）

学会専用サイトへは学会 HP(<http://www.js-mr.org/>)の「学会専用ウェブサイト」から入ることができます。

## ホラロジーの会について

企画委員長 小林登志生  
(メディア教育開発センター)

昨年末に青山学院大学で、林会長のご協力を得て「ホラロジー」立ち上げ会を同大学の院生を中心に開催しました。そこで、ホラロジーって何？と怪訝に思う会員の方が多いと思いますので、ニュースレターに一筆書くことになりました。まずは、このホラロジーなるものについて、1) 多文化関係学会で立ち上げるに至った経緯、次に、2) そもそもホラロジーとは何のことなのか、について説明し、最後に、3) これを推進していくにあたり、今後の展望を述べたいと思います。

まず経緯についてですが、昨年度の年次大会が開催された名古屋で私が委員長を務める「企画委員会」が、未だ過渡期にある本学会の活性化について協議するため第1回の会合を会場で持ちました。その席で特にお願いして参加いただいた石井米雄先生(本学会初代会長・現顧問)が、若手研究者の研究奨励と本学会への関心を喚起し、会員を増やしていくための方策の一つとして提案されたのがこの「ホラロジー」でした。

ではホラロジーとは何のことなのか。端的に言えば、ホラを吹き合う会合ということでしょうが、石井先生によると、名前は真面目さを欠くかも知れないが、その真の目的は、既存の定説にチャレンジすること、そして“さまざまな仮説を戦わせ、それにより真理に迫る”こと、それがホラロジーの真髄である、とのこと。石井先生のお仲間である、河合隼雄先生(現文化庁長官、元日研所長)など関西の御大と非公式の集まりでお酒を酌み交わしながら激論したところから始まったそうです。その後「ホラロジー」と命名し、石井先生が創設した学会で、これにより多くの新会員を得る一助となったそうです。

そこで、最後に多文化関係学会で、今後ホラロジーをどのように推進するかについてです。発案者の石井米雄先生とも相談しましたが、沢山の人が集って議論をする研究会とは異なり、あくまでもインフォーマルに、そして少人数で行うのが望ましいので、まずは関東地区の主な大学の若手研究者・院生を一本釣りで集め、よくその何たるかを理解していただき、学会内外より石井先生はじめ然るべき「ホラ吹き」のベテランをゲストにお招きし、徐々に広げていければと考えております。本文を読み、「よし自分もやってみよう」と思われる方は、私に連絡いただければ幸いです。未だ定義の明確化を要し、将来のビジョンの設定もしなければならぬ新しい多文化関係学会であるからこそ、「ホラロジー」を通し若い研究者達が、異なった領域の人の話を聞き、お互いに大いに自論を唱え、既存の概念にとらわれない新たな説を形成していく必要があるのではないのでしょうか。





## 日本で5年間を過ごして

5年間といえば短いとも言えますし、また長いとも言えます。外国での滞在と思えば長い時間ですが、書き残したこと、やり残したことを考えれば、短い年月と言えるでしょう。私は、2001年4月から2006年2月までの5年間にわたって神田外語大学で異文化コミュニケーションを教えました。しかし、教職に携わっただけではありません。同僚の先生方からは多くの理論的なご教示をいただきました。その中には、2002年6月に創設された多文化関係学会のメンバーとして共に活動した方々もいらっしゃいます。そして、学生達や周囲の人々、日本の友人達から多くの実践的経験を得ることができました。

日本は異文化コミュニケーションの観点から見ると、「生きた実践の場」と言っても過言ではないかと思えます。もちろん、全ての文化はそれなりに「生きた実践の場」であるわけですが、日本を知ること、理解することは、私のようなヨーロッパ人にとってより多くの時間と学習を必要とするものだと思われれます。帰国後は、日本について得た知識や理解したことを、ヨーロッパに向けて、とりわけハンガリー人に向けて、あらゆる機会を捉えて、積極的に発信したいと考えています。私の考え方が正しく、また信頼のおけるものであるかどうかはわかりませんが、出来る限り客観的な解釈に努めようと思っています。実は、これが今のハンガリーでは、大変必要なことだと感じます。というのも、ハンガリーでは多くの人々が日本に好感や親近感を抱いており、また日本人とハンガリー人が遠い親戚であるかのような感情や、日本の伝統文化に尊敬の念を抱く人も多いのですが、実際のところ、日本人を深く理解している人や日本社会をよく知る人は少ないのが現状です。しかし、こうした知識がなければ、日本の現状や極東における日本の役割、また国際社会における日本の活躍を正當に評価することはできないでしょう。

さらに、ヨーロッパにおける日本語教育・日本文化教育の現状と将来を研究することも重要であると考えます。80年代から90年代にかけての量的発展を経て、21世紀に入るとそれは質的な発展へと重心が移行しており、日本語教育の地位は安定しつつあるかに見えます。

私が日本で得た知識と情報、理解と経験は、学生だけでなく一般のハンガリー人にも可能な限り伝えたいと思っています。それは、2005年の秋に旭日中綬章の叙勲を受けた者としての義務と責任であると考えます。今後は、この叙勲に相応しい、期待に違わぬ活動をしていきたいと思っています。細腕ではありますが、多文化関係学会の一本の腕となって、将来も日本とヨーロッパ間の関係の維持と発展に努力する覚悟です。最後に、多文化関係学会理事会の皆様からいただいた多大なるご支援に深く感謝してご挨拶とさせていただきます。

## 関連学会・研究会情報



1. 日本コミュニケーション学会  
2006年6月17日(土) 6月18日(日) 会場:桜美林大学(町田市)
2. 異文化コミュニケーション学会  
2006年7月1日(土) 2日(日) 会場:麗澤大学(千葉県柏市)
3. 大学英語教育学会  
2006年9月8日 金、9日(土)、10日(日)  
会場:関西外国語大学 中宮キャンパス
4. 多文化間精神医学会 第12回多文化間精神医学ワークショップ  
2006年9月16日(土) 会場:東京(池袋)ホテルメトロポリタン

## 事務局の移転案内



本年度より学会事務局が以下に移転いたしました。  
よろしくお願ひ申し上げます。

〒480-1298 愛知県瀬戸市上品野町 1350  
名古屋学院大学 経済学部 小松照幸研究室内 多文化関係学会事務局  
電話: 0561-42-0351 内線 3411 Fax: 0561-41-1953

Administrative Office, Japan Society for Multicultural Relations  
c/o Prof. KOMATSU Teruyuki, Faculty of Economics, Nagoya Gakuin University  
1350 Kamishinano-cho, Seto-shi, Aichi-ken Japan 480-1298  
TEL: 0561-42-0351 ex. 3411 Fax: 0561-41-1953

## 編集後記



ニューズレター委員会は2006年4月から新体制でスタートいたしました。できるだけ会員の皆様のご要望を反映させながら編集に努めてまいりたいと思っております。今後ともよろしくお願ひ致します。(NL委員会メンバー:伊藤明美、生越秀子、徳井厚子)